けん玉に、新たな可能性を―

宮島彫りのけん玉

廿日市地域と宮島地域の伝統が生んだコラボレーション作品。広川さんが営む「宮島彫り工房ひろ川」☎㊹2504か、宮島伝統産業会館☎㊹1758（月曜休み）で購入可能。10000円～。

けん玉に美しく彫刻された桜―。
宮島彫りとけん玉、伝統のコラボレーション。
地域のそれぞれの持ち味を
お互いに認め合い、融合すれば、
新たな価値や魅力を生み出すことができる―。

桜が彫刻されたけん玉の販売が始まっている。このけん玉は、廿日市市木材利用センターで製造されたもの。それを宮島彫りの伝統工芸士である広川和男さんと、その指導の下で弟子の一人である沖田要さん（30歳）が彫刻を施したものだ。廿日市地域の特産品であるけん玉と、宮島地域の宮島彫りが融合し、新しい価値を生み出した。

「廿日市はけん玉の発祥の地です。地域の枠を超えた取り組みができたことに喜びを感じています」と広川さん。

宮島彫りは、江戸時代後期、甲州（山梨県）の彫刻師、波木井昇斎氏によって宮島に伝えられた木彫り彫刻の技術。木材の素地や木目を生かし、盆や菓子器などに厳島神社の風景や鹿などを彫る。その特徴は、繊細で写実的な装飾彫刻。立体的に彫り込んでいく「浮き彫り」、内側を切り込んで絵を出す「しずめ掘り」、線だけで自由に描き出す「すじ掘り」はいずれも伝統技法。その3つの技法で繊細な桜を描き出している。玉の部分は桜の木で、木質も固く繊細な彫刻に向いているとのこと。

「けん玉は、小学校時代に爆発的なブームになり、夢中で遊びました。しかし、このけん玉で、難しい技には挑戦できないと思います」と笑って話す。

実用以外の特徴を生かし、付加価値を付けることにこだわったという一品。「宮島は杓子で有名ですが、実用品の杓子だけでなく、字が書かれてある飾り用の大きな杓子も観光客に大変人気があるんです」。

理事長を務める宮島細工協同組合では、組合員の高齢化が問題となり、現在は後継者の育成にも力を入れている。

「現在、ろくろと杓子、角盆、そして宮島彫りが伝統的工芸品に指定されているのは、先人たちが組合を作り、次代に引き継ごうとしてくれたおかげです。私たちは、それをまた次の世代に引き継ぐ責任があります」。

広川さんは、宮島彫りの伝統技術を受け継ぐ後継者として大野浩さん（27歳）の指導を続けている。

「合併して市域が広がった廿日市市。それぞれの地域の持ち味を生かしながら融合し、新たな魅力のある特産品の開発に取り組みたいです」。

宮島細工　宮島彫り　伝統工芸士
ひろかわ・かずお
広川　和男さん
（70歳・宮島町）

雅号　広川一仙（ひろかわ・いっせん）。故・大谷一翠（おおたに・いっすい）氏に師事し、彫刻の道に。平成６年、伝統工芸士に認定。平成11年に中国通商産業局功労賞、平成17年に経済産業大臣賞など受賞歴多数。現在は後進の指導にも力を入れている。

▶広川さんと広島仏壇の伝統工芸士、岩本修造さんとのコラボレーションで生まれた金箔漆塗りのけん玉。

伝え残したい宝物、けん玉

廿日市の技術が生んだ遊びの文化、けん玉。近世以前から木材の集積地として栄え、江戸中期にはその豊富な素材を基にろくろ技術を中心とした木工業が発展。明治になると特産の木工玩具の製造が始まり、ろくろ技術を生かしたさまざまな工芸品が生産され、宮島の観光客の土産としても盛んに作られた。

大正８年、呉市の江草濱次さんが明治期のけん玉を改良し、実用新案として登録。「太陽」を表す玉と、三日月型に彫った皿を「月」に見立て、「日月ボール」と名付けられた。これが、現在多くの人に親しまれているけん玉の原型である。大正10年、その江草さんが廿日市の本郷木工を訪れ、このまちでのけん玉作りが始まった。

大正13年頃から全国に広まったけん玉。そのブームはこれまでにも幾度か訪れた。昭和７～10年、戦後21～23年、そして45年には爆発的なブームとなり、製造が間に合わないこともあったという。

最盛期には６軒以上が製造し、全国で４割のシェアを占めた。年間約30万個以上を製造し、海外にも輸出していた。

しかし、子どもの遊びが変化していくとともに、製造業者の転廃業が続き、そして平成10年、最後の１社となった共栄玩具㈲もついに生産を中止した。

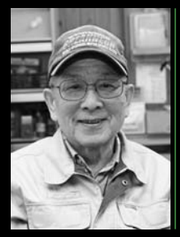
けん玉の音が、まちから消えた――。

多くの人が復活を望み、平成13年、はつかいち観光協会、商工会議所、市が連携し、廿日市市木材利用センターで、その製造が復活した。立役者となったのが共栄玩具㈲の西村保宣さんだ。

「発祥の地として、大切に次代に引き継いでいきたいと思っています」と西村さんは語る。現在は、その技術を継承するため、鍋谷一也さん（52歳）に指導を続けている。

市では平成23年から市内の全小学１年生に、センターで製造したけん玉を配布している。

けん玉の音が帰ってきた廿日市市。子どもたちは学校で、家で遊びながら「まちの宝物」と触れ合っている。



にしむら・やすのり
西村　保宣さん
（76歳・本町）

写真__1　センターでは、塗装を施した季節ごとの飾りけん玉も販売。写真は、おひな様のけん玉セット4000円。問い合わせは、廿日市市木材利用センター☎㉒2393まで。 **写真__2**　塗装を担当するのは、センターに勤める細井雅子（ほそい・まさこ）さん。「飾り物として、またプレゼントとしても親しんでもらえるのではと思っています」と話す。